

## 『憎悪と和解の大江山—あるイギリス兵捕虜の手記』

同窓生 2 名による翻訳完了、発売！！

与謝野町は現在イギリス・ウェールズのアベリスツイス町と友好関係を保っています。25 年前に旧加悦町が始めた交流を引き継いだものですが、高校生の派遣事業だけでも既に 8 回を数え、本年の秋にはウェールズの高校生 6 名を迎える予定です。その交流の原動力となったのがフランク・エバンスさんです。第 2 次世界大戦中に香港で捕虜となり、大江山鉦山や日本冶金のニッケル工場で働かされた体験から得た戦争の愚かさや平和の尊さを訴える『大江山の点呼』という本を出版されました。エバンスさんは「日本の若い人たちにこの本を読んでもらいたい」と言っておられたそうですが、エバンスさんは 13 年前に亡くなられ、本は翻訳の機会に恵まれることなく 24 年間がすぎました。

今回、加悦高同窓生の糸井定次さん（第 9 期生）と細井忠俊さん（第 18 期生）のふたりが「野田川流域で起こった戦時中の記録を残そう」と 2 年がかりで翻訳し、イギリス・ウェールズや香港での調査研究結果も加えて東京・彩流社から『憎悪と和解の大江山—あるイギリス兵捕虜の手記』という題名で出版しました。

与謝野アベリスツイス友好協会と与謝野町は出版や P R について全面的に協力され、エバンスさんの遺志を実現するために、町内小中学校、府立高校、府北部私立高校、府内の大学、府北部の図書館などに 120 部を寄贈されました。

同書に関するお問い合わせは糸井定次さん（0 7 7 2 - 4 2 - 5 2 8 4）まで。



第 2 次世界大戦で亡くなった捕虜の慰霊碑前で  
糸井定次、細井忠俊さん（大江山運動公園内）

ブックレビュー 『憎悪と和解の大江山』

加悦谷高校同窓生 杉本達夫（第6期生）

さきの大戦末期、日本は元気な男がみな兵隊にとられ、働き手が足りなくなった。その対策として、中国から4万人の男子を拉致し、過酷な労働を強いた。さらに、捕虜となった欧米兵を国内に運んで、労働力とした。本書の著者はその捕虜の一人である。ウエールズの平凡な青年であった著者は、香港で捕虜となった後、京都府の大江山麓にあったニッケル鉱山に送られて、飢餓と過労に苦しみつつ生きぬいた。その期間中、著者はひそかに日記を書き続け、監視の目から隠し通した。本書はその日記をもとにして成り立ち、鉱山での作業の内容、宿舎での暮らし、監視と管理、食べ物と病気、等々が目に浮かぶように綴られている。一個人の小さな記録だが、歴史の貴重な証言であるだろう。著者の生きぬく意志はもちろん、ひそかに日記を書き続けた持続する意志の強さに、驚嘆する。

この鉱山は、日本という国の中のほんの一点である。捕虜が送り込まれた幾つもの作業所の、ほんの一例である。戦争の記憶が風化し、あるいは被害の一面ばかりが語られ、あるいは死者の殉国が美化されがちないま、わたしたちのすぐ足元にあった加害の傷痕をも、わたしたちはやはり見つめておかねばならないだろう。「日本人も苦しかった」「ああするしかなかった」という言い分は、加害の正当化にはならないし、著者たちに対しては通じない。日本が、日本人が、なぜそうなったかをわれわれは考えなければならないし、本書もそのきっかけになるだろう。

著者は40年後に現地を再訪し、憎悪を和解に変える。鉱山のあった加悦町（現与謝野町）と著者の故郷とは、友好交流が続いている。憎しみが憎しみのままで終わらなかったのは、ありがたいことだ。

本書の訳者は香港、ウエールズの関連箇所を訪れ、丹念に資料を調べ、著者の足跡をたどって、今は亡き著者の声を蘇えらせるような調査をしている。読んでいて、訳者が本書に注いだ熱意が、字間から湧き出てくるような気がした。